

## 公私を峻別した清々しい政治家

佐々木邦彦

池田（勇人）さんが、私の郷里広島県のご出身であるところから、池田さんと昼食をとともにする会合に、私も連なることになった。池田内閣が発足して間もない昭和三十五年ごろのことである。人数は七、八人で、当時、私は銀行の常務だった。

そこで当然のこととして、池田さんとは形影相伴う間柄であった大平さんにも、面識をえた。この会合は、やがて春芳会となり、そのまま大平さんを囲む集まりに変わったので、月一回の大平さんのお付き合いは、それから二十年にわたって続いたことになる。

といつても、まことに淡々としたお付き合いであった。私はことさら政治家の方々と昵懇になろうと求めることはしなかったが、大平さんも、経済界の人間から種々の便宜を受けることをいささかも期待されなかった。

元来、国政に携わる人は何かと世間から頼られることも多く、銀行などに対して、人の紹介や融資の斡旋依頼などを余儀なくされがちなものである。しかし大平さんからは、二十年間を通じてこの種のご要請は絶えてなかった。いかに大平さんが公私を峻別することに厳しかったかを物語るものである。顧みて、まことに清々しい思いを禁じえない。

大平さんがご長男の死を悼まれた切々たる文章を読んだことがある。その中で、まだ二十四、五の若いご長男が、海外旅行中、大平さんの外務大臣就任を知り、「父が大臣になった以上、在外公館で厄介になったりしては

迷惑をかけることになるというので、終始自分の身分を秘して各地を旅行したようである」とのくだりがあった。大平さんの人生訓が、そのまま長男の行動として受け継がれていることに、感じ入ったものである。

大平さんは、生来はにかみ屋であった。政治家には珍しく、ビジョンを語らず、勇ましい姿勢をきらった。「額に汗する政治」という大平さんの言葉には、いかにも大平さんらしい思いが込められている。

「政府は国民に甘い幻想をもたすようなポーズは慎みたい。国民も政治にあまり過大な期待をもたないでほしい」というのが、首相としての大平さんの信念であった。そうした大平さんの政治姿勢に、国民の大多数は信頼と安心感をもった。私もその一人であった。

だが、思いがけない急逝によって、大平さんがその志を遂げる機会は永遠に失われた。在任中、党内の抗争にわざわざいされて、大平政治の真価を充分に発揮できないというらみがあったのは、残念である。

棺を覆うて事定まる。大平さんの政治姿勢を惜しむ声は、これからますます高まってくると思われる。謹んでご冥福をお祈りしたい。

(富士銀行会長)